

の米を飯盒一杯炊き、副食は塩だけであったが、一年振り腹一杯の食事は美味くて一生忘れることが出来ない夕食であった。

我々の部隊は病院入院者のため、満州、北・中・南支等混成部隊で、私は第五分隊班長と復員事務を命ぜられ、二日間業務をした。七月十二日佐世保へ大阪間は軍用列車、大阪で各地区毎に東海道、東北方面と、北陸線に別れ、普通列車に乗り換える。私は部隊と上海で別れたため一人で新潟県へ帰った。富山県の高岡駅で妻子に電報を打った。七月十五日、親兄弟、妻子の待つ見附駅に到着した。駅には妻子が出迎えてくれた。

昭和十七年九月召集出発の時、長女は七十二日目だったが復員したら、もう五歳になっていた。しかし、生家では兄弟四人が出征し、幸い私と末弟二名が復員、兄「誠吉」、弟「勝」二名の戦死の報が入っていた。

中支宜昌付近の戦闘

—第十三師団歩兵一〇四連隊—

宮城県 加藤 清 一

私は大正七年四月十二日、現在の古川市堤根字中屋敷二五（当時は宮城県志田郡高倉村字堤根三〇）で生まれました。家は農業で、祖父母、両親健在、兄弟は男三人、女六人で今では珍しい大家族でしょう。

昭和十三年の徴集兵、四月の検査で甲種合格、入営へ入営し、一期検閲は七月末でした。八月上旬、同年兵の主力は中支の歩兵第一〇四連隊（第十三師団）に転属したが、私は原隊に残りました。

原隊での初年兵教育は厳しかった。飯が食えない程でした。古参兵は満州帰りの歩兵第四連隊の人、朝鮮の羅南、関東軍帰り及び後備兵と何段階もいた。内務班は辛い、毎晩ビンは消燈後で、何処かの班で始ま

ると「あの音聞いたか」と、ビンタが始まる。その時はまだ私的制裁が多かったです。

教育では軽機関銃、教官は召集予備役の川崎少尉と黒木見習士官で、黒木教官は現役志願をした人なので張り切っていた。一個班三十名、六個班（第一〜四班は甲種合格者、第五、六班は召集兵）で、教育期間は夏だったので暑さのため亡くなった人もいたらしい。

我々が仙台市で相模を見物して帰って来た時、「これから呼ばれた者は石廊下に集まれ」と言われた。私は外されたが、石廊下の人は「これから外地へ行く」と言い渡されたのです。

私の内地の勤務は昭和十五年十月頃までで、その間三か月毎に兵隊が入って来た。私は被服係を命ぜられた。しかし予備兵がいるので襦袢（シャツ）二枚を着、巻脚絆二つ巻いて外出する者もいる。これが判っていても古参兵には言えない。

昭和十五年八月、歩兵第四連隊が満州から帰って来た。それで被服の申し送り（被服検査）の時、員数が合わない。被服係下士官は私に一切任せていたので神

経衰弱になってしまった。敷布を半分にして一枚と数えても員数が合わない。兵器は外出の時外へ持っていくかぬが、被服は地方へ持っていけば役に立つから、こういう苦勞もあつたわけで、若い被服係の悲哀を味わつたわけです。

本隊の第四連隊が帰って来たので、今までの留守隊の人たちは員数外となり、古参兵、召集兵は満期除隊、召集解除となった。そのため留守隊は中隊で二〜三名を残し、歩兵第一〇四連隊へ転属となりました。

我々は昭和十五年十月出発したが、その頃は私も二〜三年兵の上等兵になっていた。連隊全員宇品港から出港したが人数は四〜五百名ぐらいで、船は一万吨級の貨物船だった。私は分隊長だったが、航海途中は時化で、船室、船倉まで海水が入って来るといふひどさなので、船酔いのため食事もとれぬ。漁師だけが酔わずに食事をしていました。

揚子江河口は海水が茶色になり大陸に着いたと判つた。遡って南京に上陸、二、三日後、また船で揚子江を溯航、安慶付近には何隻も船が沈んでいる。こんな

後方にも敵がいるのかと思ひながら漢口に上陸しました。

そこから孝感までは汽車、トラックで沙洋鎮―河溶鎮、これを越えると第十三師団管轄となる。トラック一台には完全武装の兵八人しか乗れない。しかし、この時は兵器は布にくるんであり、小銃は二銃だけである。そのため敵情を確認してから出発し、夕方鴉雀岑（宜昌の十里ぐらい手前）の旅団予備隊や師団輜重隊の駐地を通って宜昌に着いた。

師団司令部のある宜昌に着いたのは十二月二十七日、もう真暗でした。すると、バンバン銃声がする。演習かと思ったら第一線での射ち合いの音でいた。トラックを降りると私は懐中電燈で照らされ、「後藤来たか」と声をかけてくれたのは高橋軍曹で、「俺の所へ来い」と第二中隊の指揮班へ入られました。前任者が帰還するので、引き継いで陣中日誌、戦闘詳報などを書かされた。中隊長も交替で阿見の宮本中尉がなられました。――宜昌は中支の第一線、第十三師団は戦闘専門の師団だったので随分苦労したでしょう。

宜昌の河（揚子江）の中の島などには歩兵第五十八連隊がいて、敵の攻勢が激しく守り切れず、昭和十六年一月「宣西突破作戦」をやって、第五中隊が参加したが、その留守に我が第二中隊が行った。

敵が反攻して来た。蒋介石は「江防司令部」を設けていたが、山で自動車も行けぬ厳しい所。（私は六年ぐらい前、旅行で重慶まで行きましたが揚子江岸は断崖絶壁で、頂上は雲にかくれていた）。その時は鉄道も自動車もない。蒋介石は日本軍が揚子江南岸や、宜昌西方に進撃しないよう歯止めとして反攻して来たわけです。

宜昌付近には第十三（鏡）、第三十九（藤）の二個師団がいて、重砲も配属されていたが、一発射つと十発返ってくる。敵も第一線級の正規軍部隊でした。その間、何回も戦闘をやった。空軍も重砲も参加したが、ある時、第三中隊が突撃した所へ味方の重砲の一発目が炸裂し小隊長が戦死した。重砲は現場が見えない遠い所から射つから歩砲連合戦にはこういう事故がたまにあったようです。

昭和十六年三月、我々の第二中隊が旅団予備隊となり鴉雀岑へ行った。警備範囲が広いので、敵が毎日侵入して来て毎日戦闘していた。第一大隊長が貫通銃創で戦死したというので直ぐ救援に行つて、その時初めて戦死者を見ました。家を壊して十数名の戦死者をその上に並べ火葬をしていました。

そこは一面麦畑、隠れる所がなく家の中からやられた。その時一時間ぐらい掃射したが敵は逃げてしまった。正規軍かゲリラかは判らないが、沙市の方から来た友軍の応援隊も敵が逃げた後だったといっていました。

今言ったように警備範囲が広いから毎日が討伐でした。一度出れば一週間から十日間、約五十里（二百キロ）、敵と遭わなければ何処までも歩く。第二線は敵と遭えば休めるが、苦しい戦の時は予備隊（三分の一）が出されるので、予備隊の方が犠牲が多い。

—第十一軍が長沙作戦をした時、十三師団も参加したのではないですか。

その後、長沙作戦が始まり師団の半数が参加した。

第五十八連隊と第一一六連隊が参加するので我々の第

一〇四連隊第一大隊（三中欠）は第一一六連隊の跡（紫金嶺）へ行ったのです。これから、長沙作戦のお返しという事で蔣介石軍の反攻が始まったのです。

その反攻戦が宜昌付近の戦闘です。とにかく我々は敵の中にいるのですから、揚子江の渡河点古勞ハイに敵が来るというので、我が部隊は逐次行つて監視や討伐をやっていた。

ある時、山に行つてみると古勞ハイに敵が入っている。多数の敵が河を渡つて市街地に入っていたので、山砲を一発射つたら大反撃を受け、我々は山伝いに撤退をしました。私は稜線の蔭を行つたので砲弾をのがれ犠牲者は出ませんでした。

今度は、北の方から鴉雀岑に敵が反攻して来て司令部が危ない、守る兵隊がいないのでそれを守備すべく我が第二中隊が急行した。そこへ着いたら砲撃の間隔が無く、弾がガンガンと連続して落ちて来る。後で聞いたら百門近い砲の射撃で、一発毎の切れ目がないのです。

次に第六十五連隊が鴉雀岑の北方で包囲され、そこへも応援に行ったが、夜だったので重機関銃の火が見える。夜半こちらが行く、敵が退るので遭遇しないで済んだが、谷間には敵の死体が累々としていました。

昭和十六年夏、敵は宜昌の市街地まで入って来た、慰問団が看護婦をしたという大苦戦をした。日本軍は第一線のみで第二線が無い。中へ入れられたら苦戦をするので、それからは第二線を作ったといえます。

蒋介石軍のこの反攻作戦は二週間くらい続きましたが、宜昌が陥られるというので、長沙作戦参加の第五十八、第一一六連隊が反転した。自分の地元が危ないというので、山を越えると時間がかかるので道路を通って来た。それを敵は待ち伏せして攻撃したため、我軍も随分犠牲を出したといえます。

次に宜昌北方作戦についてお話をします。この作戦は正攻法ではトーチカなど堅固な陣地があり、洞窟が天然の陣地となり、そこから射たれるという。そのため真正面から攻撃出来ず、私たちは鴉雀岑から後の方へ四、五日がかりで回りました。

この作戦では中隊も三分の一の戦死戦傷者を出し、戦闘能力をなくしました（一人負傷すれば担架で二人の兵が付いていく、そのため三分の一戦傷すれば、戦闘する者はほとんどいなくなる）。

この時、私の直接上官の生井准尉（福島県出身）も戦死されました。河岸に出たら夜が明け、胡麻畑の中を中隊は縦隊となっていた。私が動いたのを見て、敵の重機関銃が一斉射撃をしてきた。私の身代わりに准尉が腹部貫通銃創で壮烈な戦死をされたのです。

生井准尉と私は同じ部屋で人事の仕事をしていたので、階級抜きで話をしていた。毎日犠牲者が出るので、戦死される前「後藤（私の旧姓）、俺は軍人になるの間違っていたかも知れない。」と、しみじみ話された。これは准尉の本音だったのでしよう、と今も思っています。

我が軍はこれを制圧するため砲撃をしましたので敵の射撃は無くなった。部隊は敵の背後に出、山の裏面の敵を一挙にやった。稜線の陰の敵を射たので、その敵は味方の死体が収容出来ず、並べたまま逃げて

いったのです。准尉が戦死する前、馬に乗った指揮官がいる部隊が見えたが、山砲の射撃が間に合わない。

そのため擲弾筒で射ったが見事に命中した。後で捕虜が「連長（中隊長）がやられた」と言っていた。

なお、山砲について笑い話があるが、我が部隊の当時の山砲は四一式ではなく、三十一式山砲だったので、一発射つ毎に砲が、発射の反動でガラガラと後退してしまふ。そのため車輪をロープで縛っておく、という日露戦争前の砲である。これを敵側から見ると、一発射つ毎に砲が隠れるので「新兵器現れる」と恐れていたという。笑えぬ笑い話であります。

このような戦闘の連続によって蔣介石軍の野望を碎いて宜昌を確保出来たわけです。その後師団は刑門に行き、我々第一大隊は果道の要衝大トウロに、第二大隊は狭口、第一〇四連隊本部は当陽に移駐しました。

それはもう昭和十七年になってからです。移駐した時、前の師団から敵襲が多いと申し送りがありました。歩哨が暗夜に怪しい者らしい者を射ったので、翌朝調べて見ると将校と兵の死骸があり、将校の手帳には我

が軍の配備状況が正確に書いてあったので注意するようにとのことでした。水汲みや炊事の人夫などがスパイだったとのことでした。

大トウロには山砲、軍犬、鳩も配属されていた。分哨などは犬がいて、怪しい者が近づけば吠えるから安心でした。エイアン（遠安）県城に敵がいたということで、そこを眺められる所まで偵察に行ったが、射つとお返しが多いから射つなと言われていたので、射たずに帰ったことがあります。

その後も討伐や戦闘をやっていましたが、昭和十七年七月、連隊主力が右、中隊は左で討伐に行った。銃声があったので、無線班と重機関銃が一緒だったが敵は逃げた。山に敵がいるようなので警戒して家の陰で休んでいたが、高橋軍曹がやられた。地形地物を利用してよとの典範令にある通りすべきだったのに、無警戒に道路で休んでいたからやられたのだ。敵は指揮官を狙う。油断大敵だった。鉄帽を被ると臆病だなど言われるので、弾の中でも鉄帽を被らぬ指揮官や古参兵もいたが、そのため犠牲になった人も多かったでしょう。

また、住民の情報で分哨が包囲全滅されたこともある。何分にも敵中であるから良民といっても油断出来ぬ時もあるし、逆に住民と親密になることも大切であった。我々日本軍の立場は中々難しいことも多かったのです。

昭和十七年十一月帰還命令が出て、十二月一日山海関、十三日仙台の東部第二二部隊（第四連隊跡）着、除隊ということでした。

第二回召集は昭和十九年一月、第四十二師団要員として召集され、第七十二師団司令部に転属し参謀部付として勤務。昭和二十年九月十日復員、同十二日帰宅することが出来ました。

【解 説】

蒋介石軍の宜昌奪回作戦について、加藤氏の証言による聴き取り調査であるが、同氏の言われるように「話や記憶も前後する」とあり、次の如く史実（防衛庁公刊戦史）にもとづき補足します。

第十一軍が長沙から反転しようとした頃、手薄と

なった宜昌奪回を目指して、第六戦区長官陳誠將軍麾下の約十五師が押し寄せていた。作戦後に得た情報によると、蒋介石軍事委員長は、陳誠長官に対して「いかなる犠牲をも顧みることなく三日以内に宜昌を奪回すべし」と命じているのである。

しかし、わが方はそういう特別情報を入手しなかった。また、同地を警備する第十三師団長内山英太郎中将は、早淵支隊に約三分の一の兵力を割きながらも、「軍の後ろ髪を引く」として重慶軍反攻の模様を第十一軍司令部に通報していなかった。

重慶軍の宜昌奪回の攻撃は昭和十六年九月二十八日から始まっていた。第十三師団の各地区隊は、この日から「銃声に向かって進め」の合言葉どおり、あるいは地区内への出撃に、あるいは防御戦闘にと、昼夜を通しての応戦に追われていたのである。しかし、宜昌をめざして反攻する重慶軍は、中央直系の精銳軍十五個師であり、その支援砲兵は重・軽砲約四百十門にのぼる大軍であった。

これら大軍の集中攻撃を受けた第一線各拠点は、

次々に孤立し、重慶軍はそれらの拠点を一部で包囲する
かたわら、主力はその間隙（我が軍の守備陣地の間）を
通過して宜昌を目指して進撃してきた。と記してある。

内山師団長は、十月二日、司令部から東側約千メートルに
横たわる東山寺台地の前年、宜昌を攻撃した時、重慶軍が
使用した敵兵壕を利用（新陣地を作る暇もなし）し、全戦線
で激闘した。しかしそこに配置する歩兵部隊が無いので、
司令部勤務の予・後備兵や入院中の軽傷患者などを配置
した。その数計三百八十八名、装備は重・軽機関銃各六、
重擲弾筒六、小銃三百四十八銃しかなかった。

十月六日未明、東山寺東方陣地に重慶軍が殺到、その
先頭の一団は手榴弾を投げながら陣地に進入した。側防砲
兵は直ちに陣内に向かって発射し、彼我入り乱れての激戦
数刻、守備兵の奮戦でようやく敵を撃退したが、この日以
来、夜中になると重慶軍五個師が入れ代わり立ち代わり、
この東山寺高地に波状攻撃を繰り返してきた。

たまたま、十月七日夜、漢口に所在する第三飛行団長
遠藤三郎少将（26期）は飛行機から内山師団長の親書を
受け取り、八日早晩、砲撃下の宜昌飛行場に飛び同
師団長と面談した。内山中将は昵懇の遠藤少将の手を
握り、「ステニ覚悟ハナシアリ 病院ノ患者マデ戦線
ニ出シアリ 司令部内ニモ死傷者統出志気ニ影響スル
トコロ大ナリ 願ワクハ飛行場ノ使用シ得ル間ニ一分
隊ノ兵力ニテモ可ナルヲ以テ空輸セラレタイ」と、依
頼した。遠藤飛行団長は直ちに荊門飛行場に折り返し、
早速第三十九師団の一小隊を空輸した。

この間、漢口の第十一軍首脳も八日二十時ころ、初
めて第十三師団長から「敵五コ師宜昌東方ニアリテ夜
半ヨリ攻撃シアリ 兵力ノ空輸ヲ頼ム」との緊急電を
受けて、半信半疑ながらも心痛を始めていた。

第十一軍首脳はその状況が判明するに従って、八日
二二・〇〇、隣接の第三十九師団（藤）長に主力をも
って攻撃することを命じた。第三十九師団は早淵支
隊をその指揮下に入れ、十一日第十三師団警備地域内
に前進した。

この間、重慶軍の連夜の猛攻は続き、十月十日〇二・三〇、双十節を期して総攻撃が加えられてきた。かねて第一線連隊から奉還されてきた軍旗奉焼、秘密書類焼却、師団長以下幕僚・各部隊長の自決場所の設置等、最悪の事態に備える諸準備を整えていた師団司令部では、軍司令官に対する訣別文が暗号に組まれた。やがて十日天明とともに東山寺台上の激闘は収まり、夕刻からは雨になった。

十一日午後から第三十九師団は第十三師団の警備地域内に進撃、兩兵団は手を携えて攻勢に転じたが、重慶軍は軍公路を徹底的に破壊して、十日夜および十一日夜の雨天、暗雲を利用してほとんどその全軍を後退させていた。爾後、江北地区各地に進攻して来た重慶軍をなお旬日にわたって掃討を続け、十月二十六日全戦闘は終わった。

また本作戦闘、第九戦区の東部方面にあった独立混成第十四旅団（松―後第六十八師団司令部九江）が九月二十五日から十月五日にかけて、武寧方面に、また第三十四師団（樺）は九月二十七日から十月七日にか

けて南昌南方及び西方に、それぞれ牽制のため小出撃を実施した。

第十一軍は主敵である第七四軍を撃破し、また長沙に入城したが、城市を破壊する意志はなく、作戦期間短縮の必要上からも同地に長くどまることが許されなかった。それにつけこんで、重慶側は例によって「長沙は固守しあり、宜昌は奪回せり」と宣伝に努めた。

作戦終了直後、軍が報告した戦果は、交戦敵総兵力約五十万人、遺棄死体五・四万人、俘虜四千三百人に對し、わが戦死千六百七十人（うち将校二百七十二人）、行方不明十四人、戦死馬千百六十八頭、戦傷馬千九十二頭であった。と記されている。

*第一次長沙作戦に参加した第十三師団早淵支隊（長早瀬四郎少将以下歩兵大隊、山砲二大隊基幹）

（星澤）